

リュウキュウヒメジャノメは奄美・沖縄・八重山諸島に産し、それより北には類縁のヒメジャノメが分布する。この両者は同一種だとされていたが、静岡県立藤枝西高等学校の高橋真弓先生による地道な研究によって、ヒメジャノメの亜種ではなく、独立した別種であることが明らかにされたことで有名なチョウである。

筆者は 1993 年に初めて訪れた石垣島バナナ公園の「ハブに注意」という立て札のある裏道で本種との初の出会いをしている。身近にみるヒメジャノメよりも裏面模様によりメリハリがあって、その眼状模様はみごとな自然芸術作品で、地味な普通種ではあるが大変美しいチョウだと思う。以下、紀行文の関連記述を一部改変して転載。

1998 年 6 月 13 日。与那国島祖納ホワイトハウスの近くで、フクギが果汁にみちた実をつけている場所にシロミスジを発見。初めて限りなく新鮮に近い個体がいてうれしくなる。その後もフクギ果汁を目的として 2-3 頭が次々と現れ、ルリタテハ亜種も混じる。このわずかな広場の奥はそのまま深い樹林が勾配をあげてティンダハナタの崖につながっていて、樹冠にはツマベニチョウが蝶道を形成して飛び交い、足もとの道路沿い草地の日陰ではリュウキュウヒメジャノメが休憩している。明るい日向ではタテハモドキとツماغロヒョウモンが仲良く遊んでいた。



2004 年 10 月 29 日：沖縄本部半島。八重岳上り道にも朝日が届き始めるとチョウの活動に期待したくなるが、チョウにとっては体温がじゅうぶんに上がってはじめて自由な飛翔活動に入れるわけで、シロオビアゲハのオス、メスともにさらに時間をかけて体温の上昇を待っている気配。本日の早起き一番はアサギマダラで、朝日に翅表の真珠光沢を輝かせながら大き目のカラムシの



葉っぱに点々とついた朝露をおいしそうに吸っており、次いでセンダングサの花へと移動して蜜を吸い始める。アサギマダラに次ぐ早起きはリュウキュウヒメジャノメで、朝日を受けてV字型の間歇的開翅行動をみせてくれる。

2007 年 11 月 5 日：石垣島真栄里林道。道路右手の薄暗い部分にリュウキュウヒメジャノメがいて、ぴたりと閉じた羽根裏のくっきりとした模様の美しさにみとれてしまう。ビデオカメラでねらうと、得意の間歇的開翅もやってくれる。あとはきれいなスジグロカバマダラがビデオカメラの撮影対象となってくれただけで、何度か目を楽しませてくれた真栄里ダム近くのシロウラナミシジミ発生地にまったくその姿をみることはなく、今回の八重山チョウ探索を終える。

